

『見よ、今は救いの日なり』

聖書 コリントの信徒への手紙二 6章 1～10節 讃美歌 16 352 120 517 25

説教 森田幸男牧師

昨日は土曜日でありましたけれども、神戸のポ・トピアホテルでこの会堂のステンドグラスの作家の三浦啓子先生の作品展がなされておりまして、昨日は特に「作者のトークとパフォーマンス」という新年会がありました。行ってびっくりでしたが、大勢の各界の人々が来ておられました。わたしは教会を代表して行って来ました。それで三浦先生は精力的に次々と新作を制作しておられるわけですが、しかし、三浦先生とて人の子でありまして、スランプに陥ることがあるとおっしゃいました。そして案内状にはステンドグラスの「芭蕉」の写真が描かれていました。

“何故芭蕉かなー”と思ったのです。わりに地味な色合いなんです。トークで話されました。スランプに陥ったそうです。そして思い巡らしながら近所を散歩して芭蕉に出会ったそうです。あるお家に芭蕉が植わっていて、それに光が当たったそうです。そしてパッと目が覚めたそうです。惹かれるままに、芭蕉のスケッチを沢山したということで、それを作品化されたということでありました。地味だろうが、冴えなからうが、それに光が当たる時、輝き出すんですね。

それで、パフォーマンスがあって、実際にどういうふうにして作品が出来ていくか、舞台上で実演されました。金槌でガラスを、カン、カーンと割って見せました。さすがに鮮やかなお手並みです。そして最後に来客から「テーマ」をもらって、そのテーマで原画を描くのを実演されました。「何かお題を頂戴したい」ということですので、わたしも手を挙げかけたのですが、遠慮していましたが、隣のテーブルにおられた外国の女性がさっと手を上げました。そして流暢な日本語で、「先生が今まで描いて来られたのは、地球からの視点ということだと思います。新年に際し、宇宙から見た地球を描いてくださいませんか」と言われたのです。これは図らずも私も心中で考えていたことと全く同じだったのです。後でその人の席へ行って、「同じ事を考えていました」と言いますと、驚かれました。そしてその人のご主人は日本人で、三浦先生とは親しい旧知の間柄の方でした。壇上の先生はしばらく考えられて、舞台に張られた大きい紙に、大きい簞、小さい簞で、宇宙から見た地球をサッサ、サーと書いていかれ、「いずれこれを作品にしたいですねと、おっしゃっていました。

本当に70歳を過ぎておられるのですが、次々と精力的に作品を作っておられるそういう方であっても、スランプに陥るわけですね。私たちもまたそういう時を過ごすことになります。どんなにしても気持ちが冴えないで、沈んでしまうことがあります。そういう時に、天来の光が、地上の芭蕉なら芭蕉に当たる。別に芭蕉でなくても、何でもいいと思うのですが、野草でもそこにパッと光が当たるとその小さな存在が本当に宇宙の代表のようになる。そうすると、自分は小さい存在なのだけれども、決して小さくは

ないという、そういう思いで力が充実してくる。これは私たちの生活での経験でもあると思います。一瞬の閃光で、たった一言で、真理に目が開かれるのです。

もう一つ、わたしは、カール・バルトのことはよくお話ししますが、彼はスイス人の牧師で神学者ですけれども、ドイツのボン大学で神学教授をしておりました。ドイツでは、牧師の謝儀も国から出るので、牧師も神学者も公務員ですね。公務員はすべて、「ハイル・ヒットラー」と手を上げて宣誓をしないとイケないというようなことが法制化されました。しかし1935年、バルトはそれを拒否します。それで免職になります。「それならあなたはドイツの公務員としては勤めは出来ないの、国へ帰れ」ということで、彼はやむなくスイスへ帰ったわけです。その別れの時に彼が学生たちや同僚に言い残した言葉があるのです。「大事なことは釈義ですよ。一も二も三も釈義ですよ」と、そういう言葉を言い残してスイスへ帰って行きました。つまり、徹底的に聖書を読むことですよということです。そして戦後またすぐ復帰して、ボン大学で夏の集中講義をしたのが、「使徒信条」の連続講解で、それが『教義学要項』という本になって出ています。これはわたしの唯一の愛読書です。もう何百ぺんというか、部分的には何千回と読み返して来て、今日に至っている本で、もうぼろぼろになっています。その度に補修して、半世紀近く読んで来ました。

「釈義」というのは聖書を読んで、これを解釈するということですね。今それを思い出しましたのは、今日のこのコリントの信徒への手紙の6章1節から10節、これは正にパウロが旧約聖書、そして人々を通して聞いて来た事柄、イエス様のこと、そして自分が出会ったイエス様のこと、そういうものを本当に思い巡らして、彼は釈義したわけです。新たな発見の喜びをもって釈義した。それは何も今日のこの箇所だけではありません。どの箇所も聖書を本当に新たな目で読んだわけです。それで書き伝えたものが、このパウロの手紙ということになります。

そのようなことでありまして、私たちにとっても勿論、今申したようにスランプがあったり、行き詰まりがあったりは、イスラエルの民同然、パウロ同然、ペトロ同然にあります。そういう時に私たちはどうしたらいいのか。以前わたしは、「詩編は150篇あるけれども、もうどうしようもない、聖書の箇所も浮かばない、お祈りもできない時には、詩編を初めから終わりまでずーっと読むこととお勧めしたことがあります。必ず、“あっ、これだ！”というものに出会われると思います。それは私自身の体験でもあったので、そういうふうに申し上げたのですけれども、この聖書は権威ある書物なのであります。そういう行き詰った人がそういう中で、本当に天来の光を浴びて、蹲っていた人がもう一度天に向かって目を上げたというか、そして光り輝いたというか、そういう発見の喜びに満たされて書き遺されたものが、この聖書という書物なのです。

ですから私たちも釈義というか、聖書を読む。しかも正しく読む。正しく読むと言ってもどこまでも自分の理解の程度に応じてしか読めない。これはもう仕方ないことで、人間の理解には限界があるのです。経験してきた事、色々のことを通して得た知識とか、そういうものを持って私たちは聖書を読む。それ以外のことは出来ません。けれどもできるだけ聖書が語っていることを間違いなく聞こうという思いをもって聖書を読む。そういう

ふうに繰り返し読んでみると、本当に聖書が私たちにとってあるとき、光り輝く。そして本当に発見の喜びに満たされるということになると思います。

私自身は昨年来発見の喜びの中にいると思います。そんなことで今日の箇所を読んで、“ああ、パウロは本当に聖書を読んだのだ”と思いました。彼はパリサイ派の学者としての訓練を受けた人ですから、本当に聖書を読むことの出来た人ですね。ギリシャ語も読めた。ヘブライ語は言うまでもない。ですから彼は世界の伝道者になれたわけです。当時の世界共通語といえばギリシャ語、コイナーと言われる共通ギリシャ語ですから、それが出来た。そして旧約聖書の言葉を読むことが出来た。そしてパリサイ派として熱心に読みましたけれども、読み方が間違っていた。けれどもそれにも気がつかない。その間違いを知らされたのが、天来の光としてのキリストが彼に臨まれた時、キリストご自身が聖書を読まれていたように読む、その視点をパウロは与えられたと思うのです。そして今までの自分の読み方が間違っていた。その間違いに気がつかないで、また大きな間違いを犯してしまった。キリスト者を迫害した。教会を潰した。そういう償うことのできない過ちを犯すことになったのですけれども、そのこともキリストの光に照らされて、啓示の光に照らされて始めて気付くわけです。その時に、これまでの自分が全てつぶれてしまいます。そしてそこから彼はもう一度再起することができたのです。パウロ自身の復活と言ってもいいでしょう。創世記に、人間が創造される時に、神様は土の塵で人間の形を造ってその鼻に息を吹き入れられたら、それが生きた人間になったということが書かれています。それと同じように、彼は一回崩れて、塵のようなものになった。けれどもキリストが臨み、その彼に神の霊が吹き入れられて、彼は新しい人間として再起、復活した。そういう者として、そういう目でパウロはこの手紙を書いた。そして福音を伝えた。それが今私たちが読んでいるこの手紙なのです。

それで、今日の箇所を読んでいきたいと思いますが、始めに、「わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません」と言っています。彼はかつての自分を見て、本当に神の恵みを無にしていたという自覚がありますね。そして彼はこう言うのですね。「神の協力者としてあなたがたに勧めます」と。彼は自分のことを「神の協力者」だと言っています。

私たちも教会総会が間もなく、今月末に開かれます。そして長老、執事の選挙もあります。牧師の場合も、教会総会で選挙され、そして招聘されます。わたしは赴任してこの春で14年になります。時々申しますブラジルの教会は、牧師という職務はないのです。長老と執事、それにもう一つ、三職あるのですが、そのもう一つは実は「協力者」なんです。我々の教会に来たことのある大塚さんは、協力者で、長老でもなければ執事でもありません。この三職があるわけです。私たちの教会の職務と重ね合わせてみますと、私たちの教会は、牧師、長老、執事が役職としてあるわけですが、それ以外の方々は信者として教会員ということですが、ブラジルの方式を採用すると、教会員の人たちは皆、協力者ということになると思うのです。神の協力者です。

協力者の必須の条件は何かと言いますと、協力する相手がどういう思いを持って、何を

しようとしているのかということを知ることです。そういうことを知らないで、むやみやたらにやれば、有難迷惑、手伝ってもらわない方がいいということによるわけです。その人が何を求めているかということを知らないで、熱心である。これがかつてのパウロの姿なのです。神のためと思って熱心さはピカーですけれども、神の御心を知らないで熱心であった。深い知識を持たないで熱心であったということ、彼はローマの信徒への手紙の中で言っています。そのように協力者にとって必須不可決の条件は、この場合は神の協力者ですから、神の御心はどこにあるか、何をされようとしているのか、そしてこの私にどういう協力を求めておられるのかということを知ることがなければ、協力することは出来ないわけであります。

パウロは、「神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません」と言っていますけれども、その「神の恵み」というところに神様の御心がある。彼は熱心だったけれども、愚かであった。そのためにとんでもない過ちをしてしまった。それは償い得ない。そういう者を神は顧みたまうのだという、その事を聖書を通して、そしてキリストの現れを通して、パウロが知らされたその恵み、そのようにしてパウロは新しい目を与えられたのです。

そのようなことでありまして、パウロは新しい人として、伝道者としての召しを受けて、その任務に就いた。彼の力と熱心が神の恵みによって活用されて行き、本当に世界大に福音が宣べ伝えられることになっていきました。今日の後半のところ、伝道活動という神に仕える道が容易ならざるものであることが書かれておりますね。

「大いなる忍耐をもって、苦難、欠乏、行き詰まり、鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢餓」、こういうことが本当に日常的にパウロの身に起こったということですね。「『わたしたちは、あなたのために、一日中死にさらされ、ほふられる羊のように見られている』と旧約聖書に書かれているけれども、その通り、今日死んでもおかしくない。今日死んでもおかしくないというような毎日でした」とローマの信徒への手紙8章にパウロは記しております。そういう伝道者としての道を歩むことになりました。

今度は2節を見ますと、「なぜなら、『恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた』と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ救いの日」こういうふうにありますけれども、この2節の鍵括弧のついた言葉は、旧約聖書のイザヤ書49章8節からの引用であります。そして、「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」というこれは詩編の69篇14節からの引用です。ということは、引用するときには、そのイザヤ書の49章とか、詩編の69篇ということもパウロは恐らく暗記していたと思います。だから彼は暗記で手紙を書きますから、原文どおりでないことが多いのです。主旨は頭に入っているの、主旨を踏まえて自分なりに書く。手紙ですからいちいち巻物の聖書を開いて書かないわけです。私たちはもうこんな小さな聖書を持っていますから、開いて見ることが出来るのですが、彼はそんなことはできません。聖書を携帯することはあり得ないわけです。ではどうするのか。正に携帯するのですが、心に聖書を刻みつけて携帯するわけですね。ですから獄に入れられた人たちでも、聖書の差し入れがなくとも、皆魂に聖書を刻んでいるのです。それが支えになりますね。パウロも何度も投獄を経験し

ていますけれども、魂に刻んだ言葉がそういう中で支え、光り輝くのです。それでイザヤ書や詩編は聖書を代表するものと言ってもいいのですが、それを思い巡らしつつ我が身に起こった事などをここに書いているわけです。そして「今や、恵みの時、いまこそ、救いの日なんです。それは今日なんです」ということをパウロは言っています。

私はこのところがよく分らないでこれまで読んでおりました。けれどもパウロはそういう自分の経験を踏まえて、このイザヤ書の49章でもそうなんですが、彼はこう言っているのですね。

「主は母の胎にあるわたしを呼び、母の腹にあるわたしの名を呼ばれた」と。

これは第二イザヤが召しを受けた時の言葉なんですね。神の僕として仕える道はということかということが、この49章の1節から9節まで出ていますけれども、そのイザヤの召しの場合でも、「主は、わたしが母の胎にある時わたしの名を呼び、母の腹にあるわたしの名を呼ばれた」とある。これをパウロ自身が自分の場合に当てはめて、ガラテヤの信徒への手紙の中で、「わたしを母の胎内にある時から選び分け、恵みによって召し出してくださいました神」とこういうふうに言っていますから、イザヤが召された時と同じことを自分も経験したというのです。勿論母の胎にある時のその胎児は、神の声を聞くということは現実的にはありません。けれども、長じてというのではなく、神の計画は母の胎にある時から、そして例えば預言者エレミヤの場合は、「わたしが母の胎に造られる前から、神はわたしを預言者として立てようとなさっていた」というようなことがエレミヤ書の1章に書かれています。

どういうことか？ 現実の神に捉えられて、伝道者、預言者として立つのは、もう人間として成長してからの事ですけども、しかし計画そのものは、母の胎に造られる前からの神の御計画なんだ、とエレミヤは言い、イザヤは言い、そしてパウロも言うわけです。

そして現実の本当に目が開かれるというのは、今日ここで起こるわけですけども、そこに至る神様の御心というものが偶然ではなくて、正にズーっとあって、それが時満ちて起こるのです。そうしますと、人間にはスランプの時もあれば、行き詰まりの時もあり、真っ暗な時もあります。けれども、それも光の時に向かって、正に神の救いが示されるその時に向かっての「時、時」なんですね。そうしますと、今がたとえどんなに暗くても、今は恵みの時、今は救いの日なのだということです。これは昨日もそうなら、今日もそう、明日もそうです。そして救いについての本当の理解、恵みについての理解というのはどんどん深まっていくし、進化していくと思います。

この宇宙の事について進化論を否定する保守的なキリスト教会がアメリカにも、世界中にもありますけれども、進化論を受け入れないで、そうして聖書を読む。それも聖書に書いてある通り、人間は土の塵で造られて、鼻から息を吹きいれたという紙芝居で見るような理解で、それで聖書を正しく読んでいると考えるのです。でもそれでは駄目ですね。人間は進化してきて、いろんな発見が次々となされてきたのですから。そんな事を認めたら、聖書が言っていることがくずれるなんて、そんな幼稚な聖書理解ならば、進化論なんて認めないということになりますけれども、色々な発見が次々となされているのが今日です。

それらの知見も私は大歓迎であります。というのは、新しい発見があるたびにこの宇宙の広がりやすさというものが増して行く。

今日の聖書の最後 10 節をご覧ください。「悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのようで、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてのものを所有しています」とあります。「すべてのものを所有している」とパウロは言います。そして宇宙というか、地球というか、神が造られたすべてのものを私は所有しているとパウロは言います。このことは愚か者のたわごとように思われるでしょうけれども、これがパウロの実感なのです。どんどん進化していくそういうプロセスがあって、それに気がつかないけれど、どんどん知っていく。そうするとこの宇宙というものがいっそう豊かに、無限に豊かなものだということが知らされるわけですね。それこそスペースシャトルから地球を見ているのが、新年のNHKの特番で報じられていましたが、本当にこの会堂のステンドグラスの青のような色をした地球が映し出されていました。実に感動的な光景でした。

地球からお月さまを見るような、そういう視点で人間が自分が住んでいる地球を見たというのは、初めての事ではないですか。そうしてだんだんと宇宙の広がりが分かってきて、そのすべてがわたしのものということですから、私たちの知らないことが知らされていく、発見されていくということは、全部それが私自身の財産になるのですね。ですから宇宙の神秘が次々と解明されてゆくことは大歓迎であります。

そのように私たちの信仰も進化していかないとはいけません。そういうことで、イザヤ書とか、また詩編の 69 篇、この 69 篇というのは凄い詩編ですので、また後日読んでいただきたいと思いますが、これは十字架の主イエス・キリストをあらわしている詩編でもあるのです。主イエスは十字架上で、「わたしは渇く」と言われました。十字架上の七言の一つですが、その時に兵士たちが酸いぶどう酒をイエス様に差し出したと福音書は書いているのですが、或いはそれは安ものぶどう酒を彼らが飲んでいたものを差し出したのかもしれませんが。ヒソプの枝につけて。ということが 4 福音書全てに、少しづつ違うのですけれども記されています。その典拠になったテキストが詩編の 69 篇なのです。ということは、ただイザヤ書、詩編だけでなく、パウロは十字架のイエス様というものもこの詩編の 69 篇を通して思い巡らしている。

そうしますと、今日のこの箇所は、ある意味では聖書全体をパウロが思い巡らして書いていることになります。そして、「今は恵みの時です。今は救いの日です。あなたにとって」と言っているのです。

これは星野富弘さんの今年のカレンダーですが、これも実は随分進化しているのです。今のこのカレンダーは、破らないでも一枚はずせるようになっているのです。以前はこんなことは出来なかったですね。今は好きなところがはずせるようになっていて、随分工夫したのだと思います。下部のカレンダーの部分を取ると、上の絵だけが残るような仕組みになっています。この絵は「チトネヤ」という花のようですが、こう書いてあります。

憎らしいあの人も、見飽きた風景も、

もしも今日で終わりだとしたら、たまらなくいとおいしい。

だけど今日で終わりなんてと思うだけでも寂しい。

憎らしい人がいていい。退屈な毎日でもいい。

明日が来てほしい。

こうすることで、チトネヤの花言葉が“明日”というのです。それでこういう詩を書いたということです。

憎らしい人もいなくはありませんね。スランプの時もあります。時間があるのにすることがないという時もありますけれども、でも明日を待たないで、今日が恵みの時、救いの日なんですね。そして今日は、一人一人に違うのです。勿論一日も早い今日であってほしいと願いますけれども、やはり一人一人に訪れの時というのは違うのです。

というのはどういうことか？ 神様は一人一人、個々に目を留めていてくださるのですね。ある人には今日が満願の日ですけれども、ある人には明日でないといけな。或いは一か月後でないといけな。先ほどのイザヤ書 49 章というのは「第二イザヤ」です。イスラエルが五十年間もバビロニアで捕囚になっていた。“もう神様に私たちは見捨てられた”と皆が本当に思っている時に、第二イザヤという預言者を召し出されて、「そうではないのだ。この五十年の苦しい試練の時を経て、それを抜けた時に、あなたがたが本当に光となるのだ」と。イザヤ書 49 章 3 節に、「主は私に言われた あなたはわたしの僕、イスラエル あなたによってわたしの輝きは現われる」という言葉もあります。

もう活路が開かれることはない、そういう闇を経験した者が、そういうところから解放された時に、そういう経験をした人間によって神の恵みというのは輝き出るのでね。ですから、一人一人に時があるのです。ただいたずらに神は時を延ばしておられるのでは絶対ないのです。だって生まれる前から神様はこのエレミヤを覚え、パウロを覚え、そして時満ちて母の胎に宿し、そして・・・ということなので、偶然ではないということです。そういう今の時なので、今日は救いに向かっている時、啓示の時、恵みがあらわされる時に向かっていると、こういうことでもあります。

詩編の 69 篇の中に、パウロはイエス様の十字架の姿を見ていると先ほど申しましたけれども、実は“ああ。それだけでもないのだ”と、これは私の発見の喜びでもあるのですけれども、最後に 10 節をもう一度読みます。

「悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのように、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてのものを所有しています」と言っているのですが、実はこの「物乞いのように」という言葉が、「山上の説教」の冒頭の一句に出て来るのです。マタイによる福音書 5 章の 3 節です。「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」「物乞い」という言葉はここには出てこないのですが、これが翻訳の問題なんです。「貧しい」という言葉はギリシャ語で「プトーコイ」です。正にこれは乞食の貧しさ、無一物の貧しさを指す言葉なのですが、今日の「物乞い」というのは一字も違わない「プトーコイ」なんです。もう何も無い無一物、物乞いのような状態なのだけれども、私はすべてを所有しています。これはイエス様がおっしゃっている、「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである」ということと、パウロがここで言っていることとは実は一つなのだ、

こういうことでもあります。こういうことが釈義の報いなんです。日本語で読んでいても、ここから「山上の説教」の冒頭に戻れる人は、優れた感性の人だと思います。凡人はそういうことはできませんね。わたしにもできません。けれども“こういう物乞いとか、無一物は、ああ、「山上の説教」のあそこの無一物を表す言葉だったなー”というふうなことを思い起こして、ギリシャ語の聖書をもう一度よく見直してみたら、「プトコイ」だと、こういうことが分かるわけです。するとパウロがどれぐらいの視野でこの文章を書いているのか、そのことが分かります。パウロはここまでの広がりや深まりを視野に入れて書いているのだ。だから逆に言いますと、このパウロの手紙の方がマタイ福音書よりだいぶ古いのです。「山上の説教」の方が新しいのです。マタイによる福音書を書いた教会の信者は、パウロのこの手紙を読んでいたかもしれませぬ。逆にこのパウロの6章の10節などを読んで、“ああ、そう言えば聞き及んでいた、「心の貧しい人々は幸いである、天の国はその人たちのものである」とパウロ先生が言っているのは、イエス様がそう言われたことなのだなー”と思い起こした人が「山上の説教」の編集をしていった可能性もあると思うのです。どちらが先でもそれはいいわけです。要は、無一物であろうが、けなされようが、行き詰るようが、まあスランプぐらい易しい問題です。当事者にとっては大変でしょうが、でもそれも恵みの時なのです。救いの満ちるその時に向かっていく、神のキリストを賜るほどの愛の導きの時なのです。ですから何も持たないようだけれども、御子を賜ったのですから、壮大な宇宙のこのすべては神のものであり、そして神はご自分のすべてを私たちに賜る。私たちは相続人なんですから、それこそ何があっても大丈夫です。

そういうことで、パウロは神の協力者の自覚をもって語り行動しています。本当に神様の御心を知ったら、神の協力者たらざるを得ないわけです。今開いている聖書の箇所右側のコリントの信徒への手紙二の5章の14節に、「キリストの愛がわたしを駆り立てています」という言葉があります。キリストの愛に駆り立てられて、神の協力者にならないほど歪んだ人間はわたしはいないと思います。私たち一人一人がそういう神の恵みを味わい知った者として、その愛に駆り立てられた協力者として、そして救いを経験した者として、神の恵みが私たちから輝き出るのであります。私たちはそういう一人一人なんですね。宇宙の広がりも凄いのですが、この一人の人間の持つ存在意味、価値は、何ものにも比べることができません。その自覚をもって、今年の歩みをして行きたい、そのように思います。

祈ります。

恵み深い主イエス・キリストの父なる神様。

あなたに覚えられている私たち一人一人であることを、今また新たに覚えることができ感謝いたします。私たちが深い淵に陥る時も、あなたは御名を呼び求めるわたし達の叫びを聞き助け出して下さいます。聖書に出てくる人物はすべてその事の経験者であり、証人であります。私たちもまたこれまでの歩みでその救いを経験してきた者であります。どうか私たちの信仰が進化しますように導いてください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前におささげいたします。アーメン